

博士学位論文審査報告書

2024 年 1 月 27 日

申請学位： 博士（言語教育学）
学位申請者： 田坂 康浩（タサカ ヤスヒロ）
所属： 言語教育研究科言語教育学専攻博士後期課程 3 年 G0D5022020 番

論文題目： 「気になる表現」が社会的に認知されるに至るまで
英文題目： How "Expressions of Concern" Became Socially Recognised

審査委員会： 主査 外国語学部教授 阿久津 智
副査 外国語学部准教授 平山 紫帆
副査 慶應義塾大学教授 木村 義之

I 論文の要旨

本論文は、今日において「気になる」、「違和感がある」とされる表現について、大規模言語資料を用いて、その実態と経緯を探究し、併せて、その「違和感」が生じる要因について論じたものである。

本論文は、「序章」（第 1 章）と「結論」（第 6 章）を除き、「総論」（第 2 章）と「各論」（第 3 章～第 5 章）の二部構成をとる。「総論」では、文化庁の「国語に関する世論調査」や敬語や新語などに関する先行研究によって、日本人の言葉の乱れに関する意識や言葉の変化のとらえ方について概観している。「各論」では、①組織名等への「さん」付け（第 3 章）、②名詞+「しかない」（第 4 章）、③「元気／やる気／勇氣」のやりもらい（第 5 章）について、その実態や経緯とともに「違和感」の要因を探っている。

その結果、①組織名等への「さん」付けについては、2010 年以降、増加傾向が見られ、「揺れ」の段階にある、②名詞+「しかない」については、2010 年代に「違和感」のある「しかない」の使用が増えたが、まだ「誤用」の段階にある、③「元気／やる気／勇氣」のやりもらいについては、2000 年代以降に顕著に見られるようになったが、「勇氣／元気を与える」などは明治期にすでに現れており、広く使われるようになっている、とする。「違和感」については、従来の規範的な用法からの逸脱などを主な要因としている。

II 論文の構成

本論文の構成は、以下のとおりである。

第1章 序論

1. 研究の意義と目的
2. 本論文の構成

第2章 総論

1. 国語に関する世論調査
2. 言葉の変化の捉え方に関する先行研究
3. 本稿の立場

第3章 各論（1） 敬称「さん」の組織名等への多用と敬意の揺れ

1. はじめに
2. 定義
3. 先行研究
4. 予備調査
5. 本調査
6. まとめ

第4章 各論（2） 「しかない」の多用の実態と「違和感」の理由

1. はじめに
2. 「しか」の使われ方とその効果
3. コーパスを用いた用例の収集と分析
4. まとめ

第5章 各論（3） 元気、やる気、勇気のやりもらい考

1. はじめに
2. 「気のやりもらい」の語釈
3. コーパスを用いた用例の収集と分析
4. まとめ

第6章 結論

1. まとめ
2. 日本語教育への示唆
3. 今後の課題

<資料集>

Ⅲ 論文（各章）の概要

第1章「序論」では、本研究の目的と動機が述べられ、具体的に扱う内容と構成が挙げられている。

第2章「総論」では、文化庁の「国語に関する世論調査」によって日本人の言葉の乱れ

に関する意識を概観し、敬語や新語などに関する先行研究によって言葉の変化のとりえ方をまとめ、本論文の立場を示している。

第3章「各論(1) 敬称「さん」の組織名等への多用と敬意の揺れ」では、「みずほ証券さん」、「日証協さん」などの組織名に「さん」を付ける言い方について、⑦出現時期、④特徴、⑦普及の状況について、「国会会議録」、「日本語話し言葉コーパス」、「日本語日常言葉コーパス」(以上予備調査)、「金融審議会議事録」(本調査)を用いて、調査を行っている。その結果、組織名等への「さん」付けについて、⑦戦後すぐの使用例があるが、2010年以降、使用が増える傾向が見られる、④何らかの配慮の意識が見られる、⑦半分ぐらいの人が使う「揺れ」の段階にあり、自分の品格を保持する「美化語」的な役割が強い、としている。

第4章「各論(2) 「しかない」の多用の実態と「違和感」の理由」では、「感謝しかない」、「可愛さしかなかった」などといった、「違和感」のある「名詞+しかない」について、⑦「違和感」の所在、④使用の環境、⑦出現時期について、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」、「日本語日常会話コーパス」、「金融審議会議事録」、「農林政策審議会議事録」、「溜池通信」(個人ブログ)、「Ameba ブログ」、その他を用いて、調査を行っている。その結果、このような「しかない」について、⑦規範的な用法(「少ない／不十分」という語感をもつ)を逸脱している点に「違和感」が生じる要因がある、④ブログなど(いわゆる「打ち言葉」)に多く見られる、⑦2010年代に使用が増えた、としている。

第5章「各論(3) 元気、やる気、勇気のやりもらい考」では、「勇気をもらう」、「元気をもらう」など、「元気／やる気／勇気」のやりもらい(「与える／あげる／くれる／もらう」)について、⑦出現状況、④特徴、⑦「違和感」の所在について、「国会会議録」、「溜池通信」(個人ブログ)、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」、「『文藝春秋』(JapanKnowledge)」、「『週刊東洋経済』」、「『明治文学全集』(JapanKnowledge)」を用いて、調査を行っている。その結果、⑦「勇気／元気を与える」などは明治期にすでに見られるものの、2000年代以降に顕著に多く出現するようになった、④「(人以外が人に) 与える」、「(人が) もらう」が特徴的に多く見られる、⑦「与える」における与え手の優位性や、「もらう」における与え手の関与が不明な点が「違和感」につながる、としている。

第6章「結論」では、本研究をまとめ、日本語教育への示唆、今後の課題について述べている。

IV 論文の総合評価

1. 論文提出から審査までの経緯

学位申請者は、2020年4月に拓殖大学大学院言語教育研究科博士後期課程言語教育学専攻に入学し、修了に必要な10単位を取得、外国語検定試験にも合格している。

博士論文完成発表会は2023年7月15日に実施され、論文は2023年11月7日に提出・受理されている。論文提出時における業績には、博士論文中間発表会・完成論文発表会における

口頭発表のほか、学内の紀要に掲載された論文が1本、学外の研究会大会の予稿集に載せた論文が1本ある。

審査委員会委員による論文審査会を2024年1月10日に行い、審議の結果、全員一致で合格とし、同日、最終試験（口述試験）を実施し、試験終了後の審議の結果、全員一致で「合格」と判定した。

2. 審査所見

本論文は、今日において「違和感がある」とされる表現、とくに、組織名等への「さん」付け、名詞+「しかない」、「元気／やる気／勇気」のやりもらいについて、大規模言語資料を用いて、その実態と経緯を探究し、「違和感」の要因について考察した研究である。

本論文は、大きく、日本人の言葉の乱れに関する意識や言葉の変化のとらえ方を概観した「総論」（第2章）と、上の3つの表現について、調査・分析・考察を行った「各論」（第3章～第5章）とに分けられる。このうち「各論」は、オリジナルな調査研究であり、本論文における中核に当たる。研究方法としては、上の3つの表現について、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」などのコーパスや「金融審議会議事録」などを用いて作成したデータベースを用いて、用例を広く収集し、分析・考察を行うという方法をとっている。分析・考察は、丁寧かつ堅実に行われており、各表現の使用実態、特徴、広がり、の経緯などがおおむね明らかにされている。また、各表現における「違和感」についても、慎重・丁寧に考察されている。本論文で明らかにされたことは、おおむね説得力をもつものと判断される。

本論文の優れている点は、長期間にわたる大規模な言語資料をデータベース化し、それを丁寧に分析し、各表現の出現状況（特徴）を明らかにした点にある。それをごく大まかにまとめれば、組織名等への「さん」付けについては、使用場面は「同席場面」、機能は「配慮」、定着程度は「揺れ」段階となり、「違和感」のある「名詞+しかない」については、使用場面は「ネット（打ち言葉）」、機能は「程度の高さ」、定着程度は「誤用」段階となり、「元気／やる気／勇気」のやりもらいについては、使用場面は「感動場面」、機能は「与え手の優位性の除去」、定着程度は「慣用」段階となる。このような分析は、言葉の変化を分析して記述する1つの試みとして高く評価されると思われる。本論文の研究成果は、国語辞典などの記述に供することができるほか、日本語教育においてこのような表現を扱う際のヒントを提供するものとなりうと思われる。

本論文における主な課題としては、「違和感」の扱いが挙げられる。本研究は、学位申請者が感じる「違和感」を出発点（動機）としているが、「違和感」は極めて主観的なものであり、客観性が求められる実証的研究に「違和感」をもちこむには細心の慎重さが求められる。この点において、本論文では、「違和感」の基準（あるいは定義）がわかりにくく、それを「規範から逸脱」ととらえるとしても、規範との重なり（規範的な要素）や

ずれ（非規範的な要素）を分析する点において、記述がやや不十分であり、この点が今後の課題になると思われる。

以上、審査の結果、本論文は、「大学院学位論文審査基準」（「博士論文審査基準」）に照らして、①研究テーマ、②情報収集及び分析、③研究方法、④論理構成、⑤論文構成、のいずれにおいても適切・妥当であり、⑥論文の内容が独創性を有し、当該学問分野に独自の学術的価値が見いだせるものと認める。

3. 審査委員会結論

委員全員が一致して、学位申請者に対し、「博士（言語教育学）」の学位を授与することに同意する。

以 上